

寺山修司俳句論 「私の墓は、私のことば」

五十嵐秀彦

は寺山の俳句作品である。

第一章 序論
早熟の天才歌人。
これは、寺山修司に与えられた限定的
「称号」である。限定的というには、寺山
の業績が短歌に限らず、きわめて広範囲な
ものであるからだ。まず短歌で世に出て、
その後さまざまな文芸・芸術ジャンル
(詩、小説、戯曲、映画、演出、競馬評
論、作詞、等々)を駆け抜け、今では「職
業・寺山修司」などという表現さえ見かけ
る。彼のように多方面にわたって活躍した
作家を語ることは非常に難しい。その全て
について語ることは、私の能力をはるかに
超えたものになる。この稿で取り上げるの

寺山の俳句作品である。
寺山没後二十年にあたる今年(二〇〇三
年)、寺山俳句の魔術のような魅力によっ
て俳句の森に踏み迷うこととなつた私にと
つての原点を、あらためてとらえ直そうと
考へた。論を始める前に私は次の問いかけ
をしたい。
寺山修司の業績の中に、俳句の占める位
置はどのようなものであったのか。その疑
問に立つて寺山の文学歴を振り返つた時、
俳句はあたかも「前史」という扱いに終わ
つてゐることに気づかされる。短歌の前に
位置し、少年時代の寺山修司の文芸搖籃期
として位置づけられているとするのが通説
である。それは事実なのだろうか。イエス
でありノーでもある、そのことを本稿にて

論じたい。それがひとつ。次に、俳句を寺
山文学の搖籃期として見た時、寺山修司と
いう稀有なまでに(ある意味前時代的なま
でに)神話に彩られた作家の原型がそこに
あるとされている。つまり「故郷」「母」
「父」などの俳句がそれだ。反面、前衛的
作品群というとらえかたもある。寺山修司
は戦後文学の巨人であり、同時に活字の世
界に収まらず演劇を通して現実世界に干渉
し、さらに映像という現代的な媒体を通じ
て表現し、限りなく時代の前衛であつた。
人はその視点に立つて少年修司の俳句作品
を愛すべき前衛小品としてとらえている傾
向がある。このことについて、私は、俳句
作品が寺山修司にとってけつして「前史」
的存在ではないことを述べると同時に、

「前衛」でもなければ「異端」でもないことを本稿において証明したい。寺山俳句は定型短詩としての俳句の本質から離れていたものではない。離れているどころか、詩型としては保守的なスタンスをもつてその特性を積極的に活用していたのではないか。これが本稿の二つの課題である。

私は、ここで寺山修司の俳句についてのみ論じてみたい。

第二章 神話の原型

寺山がこの世に残した句集はけつして多くはない。投稿句は別として、出版された俳句作品は次の通りである。「われに五月を」（昭和三十二年二十一歳）／「わが金枝篇」（昭和四十八年三十七歳）／『花粉航海』（昭和五十年三十九歳）／『わが高校時代の犯罪』（昭和五十五年四十四歳）。句集発行前後の寺山の活動を見てみると、とにかく重態におちいつている。早稲田大学も中退しているが、すでに三年前に

「チエホフ祭」によつて天才青年歌人としてはなばなしくデビューしており、その縁で中井英夫らの後ろ盾を得て、この作品集が世に出ることになった。中井は寺山の葬儀の際の弔辞でそのことに触れている。

『岡井隆氏の見立てではもう絶対に助からないといわれ、この稀有な才能を何とか地上に留めたいと、友人の作品社社主について、詩と短歌と俳句とを一冊にまとめてもらいました。それが『われに五月を』と、いう、寺山氏のはじめての作品集です。』

（中井英夫）

『われに五月を』ではのちの寺山の「老僧」な詐術はあまり見られず、ストレートな青春詠がそこに読み取れる。寺山俳句をほぼリアルタイムにとらえた唯一の句集（厳密には作品集）である。次の『わが金枝篇』『花粉航海』を出した頃、寺山は既に演劇実験室「天井桟敷」の主宰者であり、「書を捨てよ、町にでよう」や「家出のすめ」などのエッセイ、小説『ああ荒野』、あるいは映画『田園に死す』などの作品により注目され、「青年の教祖」と言われるようになっていた。寺山修司は

『花粉航海』を刊行したのである。

寺山はこの『花粉航海』を過去形の句集として世に出した。それまでも、俳句によって文学に目覚めたことを何度も発言し、書いている。

『中学から高校へかけて、私の自己形成にもつとも大きい比重を占めていたのは、俳句であつた。この亡びゆく詩型式に、私はひどく魅かれていた。』（寺山修司『誰か故郷を想はざる』「十七音」より）

『十五歳から十九歳までのあいだに、ノートにしてほぼ十冊、各行にびっしりと書きつらねていった俳句は、日記にかわる「自己形成の記録」なのであつた。』（寺山修司『黄金時代』「次の一句」より）

寺山が俳句と出合つたのはこれらの発言から中学時代ということになるだろう。寺山は昭和二十三年に古間木中学校に入学したが、秋に青森市立野脇中学校に転校し、文芸部部長となり、学校新聞などに童話・詩・俳句などを発表した。

『便所より青空見えて啄木忌／こんな俳句を作つたのが、中学校の一年生のときであつた』（寺山修司『誰か故郷を想はざる』「美空ひばり」より）

本人はそう言つてゐるが、どうもそれは事実ではない。中学一年のころから優れた俳句を作つていたという神話のために、たゞ彼の小さなウソである。「啄木忌」の句は初出が高校三年の昭和二十八年「青い森」（学生サークル「山彦俳句会」の句誌）であり、その前年の手製自選句集「べにがに」にこの句は載つていない。ただ、中学時代から芸術という自己表現への意欲はけつして小さなものではなかつたのだろう。中学時代の作品として明らかになつてゐる句には以下のような作品がある。

空遠く眸に浮ぶ母の顔

戸も屋根も冴えて輝く雨上り

残雪のとけて流れぬ春の道

窓あけて吹きこむ風ぞ春寒し

これらの句は、やはり稚拙な句と言わざるをえず、すでにここで母の句が出てきている以外に注目をひくものはない。寺山を俳句に強く引き寄せるこになつたのは、中学・高校の同級生京武久美の影響が大きかつたようで、そのきっかけについて二人がそれぞれ次のように書き留めているのは面白い。

『ある日、同級生の京武久美が一冊のリトル・マガジンを持つて、にやにやしていだ。「どうしたのだ?」と訊いても答えない。そこで、私は無理矢理にそのリトル・マガジンを引つたくて、ひらいてみた。それは青森俳句会という無名の小結社の出している「暖鳥」という雑誌であつたが、そのなかの「暖鳥集」という欄に、京武久美という名と、彼の俳句が一句印刷されてゐる。私は、麦畑でひばりの卵でも見つけたように「あ!」と素頓狂な声を出した。京武の名前が活字になつて、「もう一つの社会」に登録されているということは、私にとつては、思いがけぬことであつた。』（寺山修司『誰か故郷を想はざる』「十七音」より）

『中学時代、俳句に見向きもしなかつた寺山だったが、高校一年の夏、ぼくの俳句が地方新聞に掲載されたことから、競争意識をもぎだして、急に俳句に熱中し出した。ぼくとの格闘がはじまつたのである。』（京武久美「高校時代」より昭和五十八年）

そうして高校時代の寺山の句作が本格化する。寺山文学の始動であつた。確かにこの時期が彼の芸術の搖籃期であることは事実である。そして、この事実がその後の寺山神話の自作自演の原型をなしている。「高校生俳人・寺山修司」というドラマを、寺山は句集『花粉航海』を中心にして描き上げようとした。寺山は俳句実作を二十歳の時に止め、一顧だにしなかつたと自分で言つてゐる。そして約二十年後に、高校時代の俳句をまとめて刊行したのが句集『花粉航海』である、というシナリオだ。『花粉航海』の後書き（「手稿」）にはこんなことが書かれている。

『ここに収めた句は、「愚者の船」をのぞく大半が私の高校生時代のものである。』いかにも寺山らしい屈折した文章ではないか。『愚者の船』をのぞく大半が』、といふことは、裏返してみれば「愚者の船」以外にも新たに俳句を作つたと言つていい。『愚者の船』をのぞく大半が』、といふことは、裏返してみれば「愚者の船」上を語らない。例によつて意図的に謎を作ろうとしたと受け止めるべきだ。そのことの整理は、後年、『寺山修司俳句全集』の中ではぼくが明瞭にされてゐる。明らかにできた背景として、寺山が高校時代にその俳句作品を実際に熱心に投稿していだという事実がある。その投稿時代の痕跡をたどる

ことで、逆に句集刊行時に寺山が補完した句が浮かび上がってくるのである。

第三章 句集『花粉航海』の解析

【アリバイのない作品群】

私は今回『花粉航海』を読み解くに当たつて『寺山修司俳句全集』（あんず堂）を主な資料として、『花粉航海』の二百三十句を、高校時代のアリバイのある作品群と、句集発行以前に発表された痕跡のない、つまりアリバイのない作品群の二つに分けることにした。前者をA群（高校時代の作品）、後者をB群（アリバイのない句）とする。

句集『花粉航海』は九章二十三節の構成となっている。まず両群の句数を章・節別に整理した。

【草の昼食】

「十五歳」 A群：七句 B群：三句

「午後二時の玉突き」 A群：五句
B群：五句

「地上」 A群：七句 B群：三句

【幼年時代】

「暗室の時」 A群：一句 B群：九句

「愚者の船」 A群：〇句 B群：十句
「左手の古典」
「啄木歌集」 A群：八句 B群：二句

「無人飛行機」 A群：四句 B群：六句
「魔の通過」 A群：二句 B群：八句
「敗北」 A群：四句 B群：六句

「スペインに行きたい」 A群：二句
B群：八句
「少年探偵団」
「蜜」 A群：五句 B群：五句
「花粉日記」 A群：〇句 B群：十句
「魔の通過」 A群：二句 B群：八句
「敗北」 A群：四句 B群：六句
「スペインに行きたい」 A群：二句
B群：八句

「青森駅前抄」 A群：七句 B群：四句

「鬼火の人」
「ひとさし指」 A群：一句 B群：九句
「髪地獄」 A群：〇句 B群：十句
「望郷書店」
「車輪の下」 A群：十句 B群：〇句
「書物の起源」 A群：六句 B群：四句
「中学校漂流」 A群：九句 B群：一
句
「だまし絵」
「かもめ」 A群：二句 B群：八句
「出生譚」 A群：五句 B群：五句
「狼少年」
「わが雅歌」 A群：六句 B群：二句
「田舎教師」 A群：七句 B群：三句
「母音譚」 A群：六句 B群：四句

以上合計すると、全句二百三十句中、A群百五句、B群百十五句となる。

確かに寺山が言つたように「愚者の船」は全句B群である。だが、ご覧の通り「髪地獄」「花粉日記」のように全てB群の節

が他にある。そしてB群が全体の中で五十四%を占めているのである。つまり半分は高校時代の作品群であり、残りはアリバイのない作品群で構成されている。高校群の句の中に巧みに不明群の句がまぎれこんでいるわけだ。しかし寺山は『愚者の船』を「ぞく」と言つてゐる。そこに読者をミスリードしようとする寺山の意思を感じる。ここに寺山神話セオリーのひとつを見つけることができるのではないか。寺山の虚構の特徴のひとつに、多少なりとも実事が入つてゐることはよく知られていることである。一部に事実を含みながら、その事

「憑依」

実を誇張することで「寺山修司」という半架空の文学人格が作られる。句集『花粉航海』にもそのセオリーがどうやら当てはまるようだ。

さらによく読むと次の重要な事実が分かつて来るのだつた。

【プロットの罠】

『花粉航海』は寺山いわく、高校時代の俳句作品を深夜叢書社の齊藤慎爾のすすめでまとめたという趣旨の句集であつて、全体が九章二十三節で構成され、その全てに小題が付けられている。小題を見ていくと、俳句で綴つた寺山修司の少年時代の自伝的句集という体裁であることに気づく。その小題が読み込まれている句を調べてみよう。

「草の昼食」「十五歳」

十五歳抱かれて花粉吹き散らす (B)

「午後二時の玉突き」

午後二時の玉突き父の悪霊呼び (B)

同

「地上」

朝の麦踏むものすべて地上とし (B)

「幼年時代」「暗室の時」

暗室より水の音する母の情事 (B)

「愚者の船」

(B)

「左手の古典」「啄木歌集」

便所より青空見えて啄木忌 (A)

「無人飛行機」

大落暉わが愚者の船まなうらに (B)
「左手の古典」「啄木歌集」 (A)

便所より青空見えて啄木忌 (A)

「テレビに映る無人飛行機父なき冬」

(B)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「鬼火の人」「ひとさし指」

秋風やひとさし指は誰の墓 (B)

「髪地獄」

母とわが髪からみあう秋の櫛 (B)

「壳郷奴いはとり地獄横抱き」

「望郷書店」「車輪の下」 (B)

車輪の下はすぐに郷里や溝清水 (A)

「書物の起源」

書物の起源冬のてのひら閑じひらき (B)

「だまし絵」「かもめ」

書きとめしわが一瞬を老かもめ (B)

「出生譚」

絹糸赤し村の暗部に出生し (B)

「狼少年」「わが雅歌」

蝶とんで壁の高さとなる雅歌や (B)

「田舎教師」

香水のみの自(や田舎の教師妻 (A)

「母音譚」

黒穂抜き母音いきづく混血児 (A)
「憑依」「魔の通過」 (A)

汽車が過ぎ秋の魔が過ぐ空家かな (A)

(A)

(A)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「少年探偵団」「蜜」

(B)

(B)

「左手の古典」の「青森駿前抄」と、「望郷書店」の「中学校漂流」、「憑依」の「敗北」「スペインに行きたい」の、四つの節には表題の言葉を直接詠み込んだ作品は見当たらなかつた。

さて、上記を見て明らかのように、節の表題の大半がB群の作品によつているのが分かる。二十三の節のうち句から題が付けられたと思われる節が十九あり、それらの句の中で明らかに高校時代の句と特定できるものは四句しかない。このこと

から、自伝的句集であり高校時代の作品をまとめたものと言われている同句集が、その編纂時にアリバイのない句(B群)に重点を置いたプロット作りで成り立つてゐることが分かる。つまり事実としてのメモリアリズムではなく、後日意図的に創られた

架空のメモリアリズムによる「自伝」句集であるのではないか、という仮説が自然と立ち上がってくる。

【季語観の比較】

次にA・B両群を比較して特徴的な季語について挙げる。

○ A群になくB群にある季語

秋まつり／蝸牛／花粉／木の葉髪／鶴／春怒濤／螢／賜の贅（複数あるもののみ）

○ A群にもあるがB群で特に多い季語

冬（十三句）（A群では三句）

揚羽／蟻／落葉／小鳥／たんぽぽ／チエホフ忌／花／ラグビー／林檎（複数あるものののみ）

○ B群にもあるがA群で特に多い季語

桃（五句）（B群には一句）

ここに読み取れることは、A群の「チエホフ忌」が短歌「チエホフ祭」につながっていると思えること、「冬」という季語の多用に見られるB群俳句的心理的な屈折、「螢」「花粉」というこの句集を代表する季語がB群のみのことであること、などである。

A群の俳句作品が「チエホフ祭」に繋がつていくことの具体的な証明は二つある。

『季語』というのは、見事に呪物です。』
（同上）

節【自己模倣の経緯】で詳述する。B群について、単純に季語だけを抽出した議論を

しても収穫はあまり多くはないだろうが、

それでも右の例からB群が句集『花粉航海』の主たるイメージを作っていることは見当がつく。単純に歳時記掲載の季語を使つたかどうかを調べることより、私は寺山が季感をどうとらえていたのかに、より興味をひかれる。寺山自身は季語についてどのように考へていたのだろうか。後年、俳

誌『蘭』のインタビューで、寺山はこんな発言をしている。

『花鳥風月への関心も、その内実は、婦人靴に対する中年男のフェティシズムと変わることがなくて、そこで詠われる花にしても鳥にしても、それはある意味では剥製とかプラスチックのような人工性をもつてゐる。そして、そのことによつて不気味な、ある意味で一つの詩になつてくるんじゃないか』（俳句、その出会いとわかれ『蘭』昭和五十四年四月号）

【使用名詞の比較】

寺山修司の俳句も短歌も難解さという点で見た場合、どちらかといえれば分かりやすいほどと言つてもいいだろう。前衛的表現が風潮であった時代の中にあり、時代そのものをリードしていくにもかかわらず、寺山俳句は難解性から奇跡的に遠いという印象を私は持つている。たとえば、加藤郁乎の初期の俳句と比較してみれば歴然とするのである。寺山が『戦後詩』で引用した加藤郁乎の句は次の三句だった。

海はなくとも帆は帰る、折りの鏡身のかひやぐら

ななかまどの下では一切他律の痔が出る

火山学の白鳳伝に及ぼした春さきを思

ふ

寺山は加藤俳句の世界を否定しなかつたが、『大衆』は、はじめから圈外におかれ

ている》(寺山修司「戦後詩」より)と指摘することで、かえつて自らが立つ場所を明確にした。寺山俳句の立場とは、叙述的具体性にあると考える。叙述の具体性とは、いいかえれば一句の中の物語性とも言える。ここに寺山の面目が發揮されていることを見逃すわけにはいかない。寺山は、一句の中の詩性を確かにするための言葉を重視していた。そしてそれはあくまでも読者に語りかける言葉でなければならなかつた。その意味で、私は寺山が好んで使用したと思われる「言葉」を、高校時代のアリバイのある句(A群)とない句(B群)の二群で比較してみた。

(A群)

愛／逢びき／祈り／オルガン／家系／北の男／教師／綺羅／暗き桶／黒髪／高校生／荒野／五月の鷹／故郷／告白／古書売る／車輪／少女／水兵帽／梳く髪／台詞／卒業歌／ソネット／他郷／旅人／チエホフ忌／地の糧／長子／罪の日／鉄棒／道化／同人誌／友／ノラ／花売車／番人／棺／火を創る／母音／混血児／望郷／頬傷／燃ゆる頬／流灯／レーニン祭 等

(B群)

悪夢／悪靈／あやとり／暗部／遺失物／郷奴／王國／狼少年／蛾／鍵穴／かくれんば／花粉／神／髪地獄／癌／眼帯／鏡台／櫛／愚者の船／言魂／荒野／こけし人形／戸籍抄本／犀／詩人の死／私生児／死蝶／情事／神学／数理／畠／剃刃／溺死／デスマスク／鉄仮面／伝記／銅版画／独裁／日蝕／敗北／罰／ひとさし指／人妻／文法違反／辺境／法医学／魔／蜜／みなしご／無人飛行機／迷路／目かくし／わが死後等

A・B群ともにイメージの喚起力の強い言葉が使われている。こうして比較してみると、A群には明るい言葉(青春的)が比較的多く使用されているのに対し、B群では「悪靈」「暗部」「遺失物」「壳郷奴」「地獄」「癌」「愚」「溺死」「魔」などの魂の暗部を指し示す言葉が多くなっている。これらのドラマの小道具的な言葉への嗜好を感じさせる名詞が、一片の事実を内包した虚構の物語性の中に巧みに配置されている。

それは相互に響き合い干涉し合い反発し合つて、非連続性・非日常性を作り出しているのである。ここには句集『花粉航海』発刊の一年前に公開された映画『田園に死す』のイメージのアレゴリーが豊富に含まれていることにも注目すべきである。たとえば「畠」「かくれんば」「こけし人形」「情事」「溺死」「ひとさし指」「人妻」等は、映画の中に頻出するイメージ、或いは印象的に提示されたイメージなのである。A群とB群の間にはもちろん共通した言語感覚も見られるが、B群の言葉の持つ喚起力はA群のそれより数段優っている。この比較検討は乱暴すぎることは認めるし、一語からではその効果を読むこともできない。言葉は前後のそれとの間に屈折するものだからだ。しかしながら、このような乱暴な方法をもつてしても、B群の句の作成時期がA群と同じではないことを十分想像させるものであると考える。

B群の句というものが後年の作品であるという仮説を補強するために、更に私は寺山の短詩(俳句・短歌)の変遷を次のようにとらえ直してみた。

【自己模倣の経緯】

まず第一歌集『空には本』(特に「チエホフ祭」)における高校俳句(『花粉航海』A群)との類似に注目した。

○「チエホフ祭」に見られるA群俳句との

類似

- 桃いれし籠に頬髭おしつけてチエホフの
日の電車に揺らる
- ・チエホフ忌頬髭おしつけ籠桃抱き
 - チエホフ祭のビラのはられし林檎の木か
すかに揺るる汽車過ぐるたび
 - ・林檎の木ゆさぶりやまず遭いたきとき
桃うかぶ暗き桶水替うるときの還らぬ父
につながる想い
 - ・桃うかぶ暗き桶水父は亡し
 - かわきたる桶に肥料を満たすとき黒人悲
歌は大地に沈む
 - ・黒人悲歌桶にぼつかり瓢殻浮き
 - 音立てて墓穴ふかく父の棺下ろさるる時
父目覚めずや
 - ・枯野ゆく棺のわれふと目覚めずや
 - 桃太る夜はひそかな小市民の怒りをこめ
しわが無名の詩
 - ・桃太る夜は怒りを詩にこめて
 - この家も誰かが道化者ならん高き壙より
越えし揚羽
 - ・この家も誰かが道化揚羽高し
 - むせぶごとく萌ゆる雜木の林にて友よ多
喜二の詩を口づさめ
 - ・多喜二恋し桶の暗きに梅漬けて

ノラならぬ女工の手にて囁みあいし春の
歯車の巨いなる声

桃いれし籠に頬髭おしつけてチエホフの
日の電車に揺らる

寒雀ノラならぬ母が創りし火

「チエホフ祭」（昭和二十九年十八歳の
時、短歌研究新人賞を受賞し、のち昭和三

十三年二十二歳の時第一歌集『空には本』
に収められた）が、高校生時代の寺山俳句
（『花粉航海』A群）にイメージの面でも表

現そのものでもいちじるしく類似している

ことが右の引用からはつきりと分かる。そ

のと自体今更発見ではない。重要なのは

は、そのもとになっている俳句が『花粉航

海』のB群の中にはほとんど見当たらない

ということだ。

『空には本』以降、寺山は第二、第三歌

集を出してゆく。その第三歌集『田園に死

す』（昭和四十年、寺山二十九歳）が寺山

文学の核となり、そこから戯曲や映画へと

表現の広がりを示していく。そして映画

『田園に死す』が昭和四十九年三十八歳の

時、公開されたのである。その翌年、句集

『花粉航海』が刊行された。

次に、『花粉航海』B群の俳句に見られ

る第三歌集『田園に死す』との類似につい

て調べた。

○B群俳句に見られる、歌集『田園に死す』との類似

壳郷奴いはとり地獄横抱きに

・売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱き

にして枯野ゆくとき

眼帯に死蝶かくして山河越ゆ

・夏蝶の屍ひそかにかくし来し本屋地獄

の中の一冊

法医学・櫻・暗黒・父・自瀆

・中古の斧買ひにゆく母のため長子は学

びをり法医学

夕焼に暁飛びゆくわが離郷

・暁屋に剥ぎ捨てられし家靈らのあしあ

とかへりくる十二月

母どわが髪からみあう秋の櫛

・売られたる夜の冬田へ一人来て埋めゆ

く母の真赤な櫛を

母の蛍捨てにゆく顔照らされて

・トラホーム洗ひし水を捨てにゆく真赤

な椿咲くところまで

かくれんば三つかぞえて冬となる

・かくれんばの鬼とかれざるまま老いて

誰をさがしにくる村祭

B群の句に第三歌集及び映画『田園に死

す』のイメージが隠れていることが上記引

用から見て取れる。A群の句と「チエホフ祭」短歌作品の類似は直接的であったが、「田園に死す」とB群の類似はより屈折し、イメージの断片によつて繋がつている。しかしそこに通底するものを見つけることはけつして難しくはない。このことからもB群の俳句が三十代後半の寺山俳句であること明瞭になつてくる。つまりA群の高校時代の俳句作品があり、次に短歌集「チエホフ祭」があり、第一歌集『血と麦』第三歌集『田園に死す』へと繋がり、その文学世界を基盤として演劇・映像等の世界へ展開し、映画『田園に死す』となり、それがB群の俳句作品を生みだし、A・B両群を寺山独特的過去の書き換え作業をしてして句集『花粉航海』に結実させたのである。高校生俳人、寺山文学の前史としての俳句—青春俳句。これらのとらえかたが、寺山自身の思惑通りではありながら、このB群の俳句の中に、俳句との暗闘とも言うべき寺山の孤独な闘いを見る。寺山の俳句との別れについては、深谷雄大が、彼は、困難な形式の最も困難なところを追究しないまま、発表の舞台を短歌に移し

てゆく」（寺山修司の原点）『現代詩手帖』平成四年五月号と表現した。寺山自身もそのような自覚があつたのではないか。彼にとって未完の詩型となつた俳句へ、身を焦がすような思いがこの句集には溢れている。自らの神話の中で俳句を過去形として語りながら、なにゆえ晩年あれほどまでに俳句に戻りたがつていたのかの解がここに隠されていると考える。

第四章 寺山俳句の特性

【私性的超克】

前章で私は『花粉航海』に隠された文学的事実について、自分なりに解析したつもりである。次に、寺山俳句の特性について考えてみたい。

寺山は俳句の私性と連續性とを批判した。個人的なメモリアリズム、私性の桎梏の中にある、俳句が現代の詩となりえない主張している。では俳句は私性の詩ではないのか。寺山はそうは言つていらない。

つまり私性をどうとらえるかにある。ここにエピソードがある。寺山が初期に発表した短歌作品「母逝く」で、彼はこんな作品

を詠んでいる。

母もつひに土となりたり丘の墓去りがたくして木の実を拾ふ

音たてて墓穴深く母のかんおろされとき母目覚めずや

（「母逝く」より 「東奥日報」昭和二十六）

この作品が発表された後に、寺山は周囲からお悔やみを言われたそうである。彼はただ薄笑いを返しただけだった。文学世界での作られた私性の迷宮を彼はこの「母逝く」によって知つたのに違いない。寺山は俳句作品でも同様の傾向で作り続けた。そ

こに重要なポイントがある。寺山俳句のよつて立つところは、あくまでも「私」性なのである。それが作られたものであれ事実であれ、「私」性であることにいささかの揺れもない。寺山の短詩型作品が読者の心を深く摑むのは、そこにあると言つてもいいのである。寺山は虚構の「私」性の中に真を見ようとしていたようだ。

（ホントより、ウソの方が人間的真実である、というのが私の人生論である。なぜならホントは人間なしでも存在するが、ウソは人間なしでは、決して存在しないから

である。』（寺山修司『さかさま世界史』より）

つまり寺山にとって「私」性とは自ら書いた自分の「神話」であり、「母」「父」「故郷」という自伝的事実に最大限の虚構の屋根をかけることだったのだ。

寺山文学の象徴でもあるこの「母」「父」「故郷」の句について更に『花粉航海』を見てみよう。

○「故郷」の句

（A群）

夏井戸や故郷の少女は海知らず

草餅や故郷出し友の噂もなし

わが夏帽どこまで転べども故郷

にわかに望郷葱をスケッチブックに画

き

沖もわが故郷ぞ小鳥湧き立つは

（B群）

売郷奴いはとり地横抱きに

夕焼に畳飛びゆくわが離郷

芥子を踏むすでに他郷に散りぬるを

A群については、故郷へのストレートな思ひが表現されているのに対し、B群では「売郷」「離郷」という屈折した表現へと変化している。

故郷について寺山はこう言っている。

寒雀ノラならぬ母が創りし火
（B群）

暗室より水の音する母の情事

母を消す火事の中なる鏡台に

お手だまに母奪われて秋つばめ

母とわが髪からみあう秋の櫛

母の蛻捨てにゆく顔照らされて

母の句は最も典型的な対照関係を示して

いる。A群が「母恋い」の句であるのに対

して、B群ではその思いが愛憎に転じていいのが読み取れる。

A群に比べB群の俳句において虚構も高

次に昇華されているのが分かるだろう。B

群の持つドラマ性や映像的なコラージュ技

法もそこに指摘できる。

寺山自身は「私」ということについてこ

んなことを言っている。

『自叙伝などは、何べんでも書き直し

（消し直し）ができるし、過去の体験など

も、再生をかぎりなくくりかえすことがで

きる。できないのは、次第に輪郭を失つてゆく「私」そのものの規定である。』（寺山修司『黄金時代』より）

読者は『花粉航海』を一冊の「私」小説として読む。俳句という詩型のもつりアリ

ティを逆手にして「私」小説的な虚実の皮膜の中に一群の俳句を置いた。

【非連続性】

次に寺山俳句の特性として挙げたいことは、非連続性の詩ということだ。文芸における連續性の議論はあまりなされていないと思うが、韻文の場合それはかなり重要なポイントを占めると考えている。それは言いかえれば時間の流れを基本に考えるかどうかということにある。俳句における連續性とは何か。寺山はそれを俳人の私性といふメモリアリズムにあると批判した。

《全く私でない「私」》の句であり乍ら日常報告の句、私の愚痴を一步もでない句が

実に多いのはなぜであろうか。メモリアリズムからの脱出が果たされないことはどう

やら歌壇も俳壇も同じような「時評的」なやみであるらしい。しかし、これがゆめ

民族詩である証左などとたかをくくつてはいけない。私であるつもりが実は報告し終つたときにはアリバイを喪失している、といった手合が実に多いのだから。」(寺山

修司「地下室の美学」「俳句研究」昭和三十四年十月)

《日常的なメモリアリズムの俳人は、自

分自身の生活が平穏になつてゆくと、俳句の方も函敷的に無事になる。そういう意味では、精神宇宙のスケールのある俳人の方が持続力をもつという気がする。」(『俳句、その出会いとわかれ』『蘭』昭和五十四年四月)

現実を現実の範囲内に表白し、そこに

「写生」という概念を被せ、それを詩としている姿勢を批判したのである。これは俳句あるいは短詩型の本質に関わる重要な指摘である。俳句は連作を行おうとも基本的には一句独立の詩である。詩型としては本来非連続性の詩と言うべきなのかもしだれない。

ここに寺山の資質について触れた大江健三郎の言葉がある。

『寺山は、あきらかにかれの才能のしからしめることが多いですが、詩の切斷性において、屹立させる』ことをめざしていいたのでした。』(大江健三郎「自作の引用にはじまつた。」)大江健三郎「自作の引用にはじまり、引用がすべてを覆うと思われる日に向けて」より)

大江はこれを寺山の資質とらえたようだが、本来それこそが俳句の特質だと言うこともできるはずだ。そもそも十七音に連

続性を持たせること自体、ある意味幻想であるかもしれない。俳句は一句独立し、最小の言葉の塊として読者の前に投げ出されているのだ。そこにあるはずもない連續性を持ちこんでいるのが凡百の俳人の発想なのだと、寺山は言っているのだろう。

【異端?】

「私性の超克」と「非連続性」について、それらを寺山俳句の特性として述べてきた。前章の分析の中でも彼の特性についてできるだけ触れてきたつもりである。ここで、私が第一章(序論)で提示した第二の設問を思い出してほしい。

これでも寺山俳句は異端なのか、と。

寺山俳句の特性ともいべき点の全てが、本来短詩が持つている韻文性と深く関わるものであると私は考えている。寺山は昭和五十年の時点では周到かつ苛烈な詩人魂をもつて『花粉航海』を上梓した。それはかつて高校時代を回顧するようなメモリアリズムではない。しかも定型感覚に十分根ざした作品であったのである。

第五章 結論（まとめ）

第三章において私は、句集『花粉航海』の構成について分析した。そこから現れてきたものは、寺山が三十九歳の時点での過去集『花粉航海』をあたかも二十年前の過去から送られてきたものであるかのように仕掛け、自らの伝記を書き換える、青春俳句という神話を作り上げようとした彼の意思であった。あまりに神話に縛られた寺山俳句。それを解放し、戦後俳句の一成果として、私なりに正當に鑑賞しようとしているのである。今回本稿を書き上げる過程において、はつきりと三十代の俳人寺山修司を見つけたと思つてゐる。

寺山修司の俳句を構成している重要な要素は、彼の「言語感覚」にある。「故郷」「母」「父」などの寺山的キーワードは「私」性の超克のための小道具であり、修司俳句の本質を現すものは彼の「言語感覚」によって屹立した「非連續性の詩」なのである。それが何を意味するか。俳句に純粹詩として夢を託した寺山の作品は、俳句の本質になんら反しない、言い換えれば

保守的ともいえる作業であった。俳句を、この詩型でなければ表現できない詩として、研ぎ澄まされた言語感覚にて作句をして、研ぎ澄まされた言語感覚にて作句をし続けた。

子規は俳句を文学として成立させるため、絵画からの「写生」論を革命手法として導入したが、それを漫然と引き継ぎ、「あるものがあるがままに」というありえない観念に縛られ、膨大なる「ただごと」俳句の存在を許してきたのが、戦後の「現代俳句」というものなのではなかろうか。その「写生」俳句に、定型論や伝統を混同させ、スタイルされ矮小化した俳句観が横行している。「無季」や「前衛」なども、あたかも「写生」俳句への対抗軸のごとく言われている。「写生」であれ、「無季」であれ、「自由律」であれ、それが詩である限り「言葉」「文字」「音」によって構成されていてことから逃れることは出来ないのだ。つまりそれこそ俳句の唯一本質と言えるものなのである。寺山の俳句作品を読み解くことは、俳句にとって「言語感覚」がきわめて本質的なものであることを知ることでもある。修司俳句は異端ではない。異

のである。

以上のことが寺山修司の俳句を語る結論と言えるのかどうか、また事実であるか、本人が既にこの世にいない今、証明しえないものも多い。しかしながら、私はこの小論をもつて私自身が寺山修司という俳人を再発見した。寺山の俳句の伝統定型詩としてのありかたを分析し、同時に彼がその人生を通して俳人であったことを論じたつもりである。寺山の俳句が今後も、過去形としてではなく、異端としてではなく、語り継がれてゆき、俳人たちの韻文精神の高揚に資するものであることを切望して止まない。

この論を次の寺山の言葉で終わらせることは、まだ私が彼の神話から目覚めていないということだろうか？

『私は肝硬変で死ぬだろう。このことだけは、はつきりしている。だが、だからといつて墓は建てて欲しくない。私の墓は、私のことばであれば充分』（寺山修司『墓場まで何マイル？』より）

（文中敬称略）

(参考文献一覧)

- 『寺山修司俳句全集』(あんず堂)
寺山修司『花粉航海』(ハルキ文庫)
寺山修司『われに五月を』(思潮社)
寺山修司『墓場まで何マイル?』(角川春樹事務所)
寺山修司『地獄篇』(思潮社)
寺山修司『誰か故郷を想はざる』(角川文庫)
寺山修司『書を捨てよ、町へでよう』(角川文庫)
寺山修司『黄金時代』(河出文庫)
寺山修司『田園に死す』(ハルキ文庫)
寺山修司『青春歌集』(角川文庫)
寺山修司『戦後詩』(ちくま文庫)
寺山修司『啄木を読む』(ハルキ文庫)
寺山修司『悲しき口笛』(ハルキ文庫)
寺山修司『不思議図書館』(角川文庫)
寺山修司『両手いっぱいの言葉』(新潮文庫)
寺山修司『私という謎』(講談社文芸文庫)
『寺山修司短歌俳句集 海に霧』(集英社文庫)
『寺山修司詩集』(思潮社・現代詩文庫)
寺山修司『寺山修司俳句全集』(田澤拓也・虚人・寺山修司伝) (文藝春秋)
長尾二郎『虚構地獄 寺山修司』(講談社文庫)
寺山はつ『母の蛍』(中公文庫)
『ユリイカ』臨時増刊 総特集・寺山修司』(青土社)
『俳句現代 1999年6月号』(角川春樹事務所)
『文芸別冊 寺山修司』(KAWADE 夢ムック)
『すばる 2001年8月号 特集・寺山修司からの手紙』(集英社)
『寺山修司・齊藤慎爾の世界 永遠のアドレッセンス』(柏書房)